

太平天国と吉田松陰の思想形成

はじめに

日本幕末の思想を考えるにあたって、中国のアヘン戦争から太平天国の乱までの一連の動きが無視できないことは言うまでもない。従来の研究ではアヘン戦争と太平天国の乱が幕末日本に与えたインパクトは実に大きいものがあつたとよく指摘されている。しかし、アヘン戦争（一八四〇—一八四二）と太平天国の乱（一八五二—一八六四）が幕末の思想家・改革志士吉田松陰に一体どのような影響を与え、松陰の思想形成にどのような意味があつたのかについての視点が欠けていたように思われる。この従来の松陰研究上

郭 連 友

の不足を補う意味から、筆者は先に吉田松陰の思想形成に見られるアヘン戦争の影響という問題に注目し、兵学者として出発した松陰がアヘン戦争の情報に触れることによって世界情勢へ注目し始め、また西洋の侵略に備えてその兵学観や民政観に大きな変化があつたことを明らかにし、松陰のアヘン戦争から受けたインパクトが実に大きかったと指摘した。^{〔1〕}

アヘン戦争の刺激によって形成された松陰の兵学観・民政観は「ペリー来航」の時点（嘉永六（一八五三年））にいたって「民政・海防」というスローガンに結晶された。この「民政・海防」の対策は「ペリー来航」の嘉永六年頃から安政元（一八五四）年末までに唱えられていたが、安政二

年初頭から急激に変化が起きた（この変化の詳細は後述）。要するに松陰の「ペリー来航」の頃の「民政・海防」という「三元」的³海防論は安政二年初頭から、西洋近代軍事機器の導入による「海防」論を放棄し、「民政論」に収斂され、一元化されたということである。この間の思想的变化は松陰思想を理解する上で軽視できない重要な意味があるように思う。この変化はその直後の、彼の「民政論」のより一層の強調、「民本主義」の始述者孟子への傾倒、『講孟劄記』の誕生およびその後の思想的展開・深化と密接に関わっているからである。

では、一体何がきっかけでこのような変化が起こったのか。従来の松陰研究では、松陰のこの間の思想的变化について、当時の彼の情勢判断、具体的にいうと、安政元年に幕府がアメリカ（「神奈川条約」三月、条約付録の「下田条約」五月）、イギリス（「長崎条約」八月）、ロシア（「下田条約」十二月）との間に締結した和親条約など一連の外交的動きに対する分析、判断の結果——つまり、松陰から見れば、幕府の和親的態度は夷に屈服したことおよび攘夷の「機」を逃がしたことを意味した——によるものとされている。要するに、先行研究では当時国内の政治、幕府の外交姿勢が松陰の思想的転換に大きく作用したとみ、幕末の政治、外交等の動きとの関連から松陰のこの思想的転換をとらえて

いる。従来の研究者の指摘は松陰自身の「天下に機あり、務あり。機を知らざれば務を知ること能はず。時務を知らざるは俊傑に非ず。今已に天下の機を失ふ」（『獄舎問答』安政二年四月六日³）という発言に即したもので、松陰の思想転換の一面を的確に捉えていることはいうまでもない。しかし、松陰の思想上のこのように急激な変化を理解するには、ただ単に幕末日本国内の状況が松陰の思想形成に果たした役割のみに着目するのでは不十分だと思う。当時の国際状況、特に中国でのアヘン戦争に続く大事件としての太平天国の乱が松陰のこの間の思想的転換に与えた影響を考える必要があるように思われる。

松陰と太平天国の乱との関係に関しては、従来の日本思想史研究もしくは松陰研究ではあまり重視されなくて、むしろ、日本の中国近代史研究者に早くから注目されている。次に先ずそれらの研究を少し検討し、それから本稿の課題を設定することにする。

吉田松陰と太平天国との関連は日本の中国近代史の研究者による太平天国研究の論文でしばしばとりあげられている³。幕末日本に伝えられた太平天国の情報、幕末日本人の持っていた太平天国認識などの究明を課題にして書かれた論文の中で、市古宙三は「幕末日本人の太平天国に関する知識」（二九五二年）で、幕末日本に伝えられた、中国、朝鮮、

オランダなどの太平天国に関する情報をこまめに分析し、幕末日本人の太平天国観は外来の諸情報に大きく左右されたと指摘している。また、氏は、太平天国の最も正確な情報を日本に伝えた『満清記事』⁷という書物にも触れ、それは「単に太平天国の見方を変えただけではない、海防にのみ心を奪われていた日本に、内乱の外禍におとらずおそるべきことを教える警鐘ともなった」と指摘し、野山獄中の吉田松陰は、魏源の『海国図志』首編「籌海篇」(一八四二年)を読み、魏源が太平天国の乱の兆しに気づかず、一方的に大砲・軍艦による海防論を説いたことに不満だったことにも触れている⁸。松陰の中国内乱への注目、魏源の海防論への不満などは太平天国の情報に触れることによってなされたとし、松陰の「民政」「内治」への注目の根拠を太平天国に求めた。また、小島晋治は「吉田松陰と太平天国」と「幕末日本と太平天国」という二つの論文で、松陰の太平天国への関心とそれに対する認識および反応などを取り上げ、当時中国のアヘン戦争や太平天国の動きとの関連から日本の将来を考える松陰の視点を高く評価し、太平天国の乱が「内憂外患」の結合による下からの全国的動乱⁹、太平天国の道をさけるために、上からの内政改革による新たな人民の把握こそが急務であるという主張¹⁰を松陰に持たせたと指摘し、「太平天国の動乱が松陰の思想に想像以上

に大きな影響を与えている」と結論を下している⁸。

市古、小島両氏の指摘はいずれもともで、鋭いものであるが、残念ながら松陰の思想形成(転換)との関連からの発言ではなく、故に太平天国が松陰の思想形成上においてもった意味がいまひとつ明らかでない。以上の先行研究の不備を補うため、筆者はここで、松陰の思想形成・展開に即しながら、彼がどんな時期にどのように太平天国に関心を持ち、どのように研究し、どんなところに注目したのか、またその後思想上どんな変化があったのか、などを検討し、それを通じて太平天国が松陰の思想的転換ないし思想形成にどんな意味があったかを究明することにする。

一 「ペリー来航」から安政元年末頃までの松陰の思想

1 「ペリー来航」と松陰の西洋兵器摂取論

ペリーの率いた艦隊が浦賀に来たのは嘉永六年六月三日のことである。「ペリー来航」により、日本は政治的にも、外交的にも空前の危機状況に置かれることになった。国内では農民一揆が頻発し、対外的には日本は侵略される危険にさらされることになったのである。アヘン戦争の情報に触れることによって培われた松陰の軍事的、政治的思考や対策はこの頃、眼前の危機状況を克服する対策として「民

政・海防」のスローガンに凝縮され、明確に打ち出された。

彼は「ペリー来航」直後に藩邸に提出した「将及私言」や「急務条議」という二つの意見書で天皇を中心とする挙国的政治体制創出の主張を打ち出すと共に、国防上の具体的対応策を論じた。この頃、彼は今まで疑問を持ちながら拘っていた和流の兵学を放棄し、西洋兵学に全面的に傾倒したのが特徴である。彼は「本邦の砲術も強ひて是れを却くるには非ざれども、其の術多くは技芸家の言にして、未だ兵家の論定を経ざるものなれば一概に用い難し。」（「将及私言」）と和流の兵学の非実用性を批判すると共に、西洋の先進的軍事技術とりわけ西洋式の軍艦、大砲、練兵の方法などを称賛し、「西洋法に至りては、常に是れを実戦に施す故に、一門砲一口銃の論、其の精妙を極むるのみならず、戦をなすの大術に至りて、大いに然らざること能はざるものあり。故に大砲小銃共に西洋の器械節制に倣ひ、日々操練をなすべし。今日の事勢甚だ急にして猶予狐疑すべきに非ず」（同上¹⁰）、「此の時に正りて堅艦の夷人を制するに足るものを製し、……或は蘭人に命じて艦を貢せしめ、又は工匠に命じて新たに製造し、……」（同上¹¹）と記し、積極的に西洋の先進的軍事技術の導入、採用の必要性和緊急性を力説した。

2 「民政・海防」兼論

この軍事的対応策を提起すると共に松陰はまた「ペリー来航」とほぼ同じ時期に頻繁に起きた農民一揆に着目し、国内の危機を一層痛感した。当時南部一揆が勃発し、その巨大なパワーに松陰は大きな刺激を受けた。江戸留学中の彼は「ペリー来航」直後の兄宛の手紙に次のように記している。「南部の民変も容易ならざるの事に候。一先づは仙台よりの扱ひにて治まる方に向ひたるよし。然れども連年苛虐の致す所、未だ其の結局を知らず。之れを要するに内変外患常に相倚り、衰期の光景恐るべし、嘆くべし。」

（「兄杉梅太郎宛」嘉永六年七月二十八日¹²。傍線筆者、以下同）と対外的危機と関連させながら一揆をとらえている。「南部の民変」とはペリー艦隊浦賀到来直前の嘉永六年五月末、盛岡南部領三閉伊地方に起き、領内各地に波及し、一揆勢が仙台伊達藩に越訴して、藩主南部利剛の更迭を含む藩政改革を要求した農民大一揆のことを指している。この一揆は衰えるどころか、更に発展し、八月末にはその数十万人にもものぼった。この大規模な農民一揆について、松陰は兄宛の書簡で、その勃発の根因を「連年苛虐の致す所」（「畢竟民窮するより事起りたるなり」（「兄杉梅太郎宛」嘉永六年八月晦日¹³）と鋭く指摘し、為政者の政治的失策・失政を厳しく追究した。九月十日、兄宛の書簡には「南部の一揆も已

に三発に及び、此の度は十一万人にて盛岡城を取囲み、役人をも打ち取りたるとの風説に御座候。……一揆中に辰吉なるもの歳十八、博学多才、之れが謀主たるよし。安んぞ知らん陳渉・呉広もかかるものに非ざることを。何分是れにても民政海防一を欠いで成らざる事相分り申し候。」

（「兄杉梅太郎宛」嘉永六年九月十日）¹⁵とある。一揆勢力の絶え間のない拡大や「博学多才」の指導者の存在は松陰の危機感を更に深刻化させ、海防と共に民政の緊要性を彼に痛感させたのである。四日後、彼は兄宛の書簡に再びこの一揆に触れ次のように記した。「今日外患の事誠に迫れり。人々皆海防海防と云はざるはなし。然るに未だ民政民政といふ人あることを聞かず。夫れ外患内乱必ず相因ることなれば、海防民政兼挙ぐべきこと固よりなり。……此の度南部の民変も其の由来を尋ねれば廢立の不順より事起り、事体容易ならざるの事には候へども、重税暴斂民心を失ふ事、此れ亦其の一大端に御座候。鎌倉辺の民情を察し候ても農民軍役に苦しみ上を怨むこと夥しき事なれば、天下戦争の秋に相成り候はば民の動揺如何して是れを制すべけんや。是くの如き事豈に独り鎌倉のみならんや、満天下一般なるべく候。」（「兄杉梅太郎宛」嘉永六年九月十四日）¹⁶と。「ペリー来航」という特別の時期に、民心の動揺如何は戦争の勝負を決める決定的なものだと彼は考えたのである。この考えを明確

化した「民政・海防」というスローガンは主に民心の動揺を防ぐための対応策であった。

安政元年三月二十七日、彼は世界情勢を探知しようとして、ペリー艦隊再来の時、米艦に乗り、渡航を要請したが、拒否され、身柄が拘束された。これがあの有名な「下田事件」である。九月二十三日松陰は江戸から萩に送られ、土分の罪人を監禁する野山獄に囚禁され、自由が奪われた。

安政元年末頃、松陰は当時代表的な海防論、会沢正志斎の『新論』や塩谷宕陰の『籌海私議』を「紙上の空言」、「虚名空論」などと論難した発言が見える。しかし、この頃の諸家の海防論に対する松陰の批判は正志斎や塩谷の実践性の欠乏に止まっており、軍備の必要を否定するものではなかった。外国との一連の和親条約締結後も松陰は今までと変わらず軍艦の製造をしきりに力説し、叔父の玉木文之進に軍艦の建造建議を藩になすことを極力勧めた。要するに、彼の「ペリー来航」以来の「民政・海防」の持論、民政の充実と共に、大砲・軍艦など西洋の先進的軍事技術の積極的導入を眼前の急務とする姿勢は安政元年末の時点では基本的に変わっていない。

ところが、安政二（一八五五）年春から、松陰の思想に大きな変化が見られる。彼は「ペリー来航」の頃から安政元年末頃まで持っていた「民政・海防」の対応策を切り替

え、砲艦による海防の主張を放棄し、ひたすら「民政」の緊急性を強調するようになった。わずか数か月という短い間に松陰の思想にこのような急激な変化が起きたのは一体何が原因であつたろう。従来の研究で指摘されていなかった太平天国との関連に焦点を当ててみたい。というのは安政二年一月頃、松陰は太平天国の正確な情報を載せた『満清紀事』に触れることができ、中国で起きた太平天国の乱の確かな情報を獲得し、その衝撃的情報から少なからぬ刺激を受けたと考えるからである。次章から、松陰の太平天国への関心・着目・研究などを辿りながら、彼の思想的転換との関わりを探りたい。

二 『満清紀事』と吉田松陰

1 『満清紀事』という書物

太平天国に関する情報がもつとも早く日本に伝えられたのは嘉永五（一八五三年）年の冬、清商が長崎奉行に致した二通の稟報で、その後も中国だけでなく、朝鮮から大量の情報が続々と流れてきた。『満清紀事』という書物は安政元年三月頃日本に伝わったものである。

『満清紀事』は、ペリー再来の時（安政元年一月十六日）、ペリーの書記として随従して来日した広東出身の中国人羅

森（向喬と号す）が太平天国の乱について日毎に記した稿本である。もともと書名がなく、日本人平山謙二郎（平山は幕府の徒目付）がペリーの軍艦を訪れ、筆談で羅森に中国治乱の様子を訪ねたら、羅森が自分の書いた太平天国の顛末を述べた原稿本を貸し、それを借り受けた平山がそれを『南京記事』と呼び、写してから羅森に返却した。後、この写本は転写されて流布し、『満清紀事』と題して木活字本として日本で刊行（刊行年不明、安政二年以降と推測される）された。¹⁶ 刊本の冒頭に「此の編標題無く、世或いは呼んで満清紀事と為す。今、姑く此に従ふ。」（原漢文）と記されている。またこの刊本には日本人による増補があるとされている。『満清紀事』の作者羅森は太平天国の乱を目撃した知識人として、太平軍に比較的同情しつつも客観的態度でこの乱を叙述している。

2 『満清紀事』に触れる以前——松陰の太平天国への注目

松陰は『満清紀事』に触れる前から太平天国に強い関心を抱いた。

松陰が最初に太平天国への関心を示した史料として「ペリー来航」直前の嘉永六年四月二日付叔父及び兄宛の一通の書簡がある。当時、松陰は諸国の遊学の途中の大阪にいた。彼は次のように書いた。「清国（広東西の地方のよし——

松陰原注 明種の人義兵を挙げ、已に一二州を取りしきたる由、泉人^{なかさこ}中左近(熊取谷(泉南郡熊取町)の大庄屋)なるもの語る。(坂本云ふ、「其の事已に四年前より起る。元を天徳と号すと云ふ」。——松陰割注)而して未だその説の由つて起る所を詳らかにせず。阪人後藤春蔵も亦之れを語る。然れども春蔵文人は文人なれども海外の事は甚だ迂闊言ふに足らず。しかしかく所々風説あること或いは故あらん。且つ坤輿図識補清国条下にては、やそ教を奉ずるもの窃に此の志を抱く由相見え候へば、丸に妄説にても此れある間敷きか。此の事治心氣齋先生(松陰幼少時の師)へ御致聞頼み奉り候。」「叔父・兄宛」嘉永六年四月二日」と。

ここに記された太平天国に関する風説は事実としてあまり正確ではないが、松陰が三年ほど前に中国で起きた太平天国の乱に鋭い関心を示したことがこの書簡から窺える。この史料では、太平天国の乱を明の後裔が明朝の恢復を目指す運動であつて、その年号を「天徳」とみなしている。市古によれば、嘉永六年の時点に日本に伝えられた太平天国の乱の情報はすべて「天徳の年号を称する明裔朱氏の明朝恢復を志す運動」であつた。「明朝恢復」は実はもう一つの反清の秘密結社組織「天地会」のスローガンで、安政元年まで太平天国の乱がこの秘密結社組織とよく混同されていた。両者は実は無関係である。しかし、この運動が「や

そ教」との関連があるので、松陰の関心は一層かきたてられた。

彼は太平天国への強い関心から、自ら情報の収集に努めた。「朝鮮の漂船は見島に二隻、先大津に二隻、人数合せて二十七人と申し候処、信に候や。先大津の分十四人、今十二日萩着と申す事に候や。笑はれ申すべく候へども、もし中に漢字を知りたる奴どもも居り、清の国変の事どもは知らぬやらと思ひ候。此の前来る時は寅も見に行きしが漢字を知る奴一人も居らず、皆朝鮮いろはを以て日本語を書き取りをつたが、唐人送りに付き有志の士長崎には行かぬかと申し候も、当夏船冬船来たやら来たらぬやら、明裔の変の成行聞き度き故なり。」「(兄杉梅太郎宛」安政元年十二月十二日⁽²⁰⁾)と書いた。松陰が自ら朝鮮からの漂流船を訪れた漂流船に漢字の書ける人がいなかった模様で、彼は遂に太平天国の詳しい様子を知ることができなかった。更に、同じ書簡で彼は「漢土の変は大いに皇国に關係する事あればこそ、天平宝字にも安禄山反せしよし聞えければ太宰府に命じて武備を厳にし給ふ事など思ひ合せ、至つて気にかかり候。全く以て物数奇にては御座なく候。」「(同上⁽²¹⁾)と太平天国への強い関心の動機を記している。この頃、彼の関心はむしろ軍事的防衛の見地に立っていて、中国の内乱が日本の外患に連なると認識しているのである。当時日本に入つた情

報ではイギリスがこの戦乱に無関係でなく、むしろ有形無形に関わっていて、太平軍がイギリスと闘うこと、また結合すること等の噂が流れた²²⁾。この情報は松陰の注意を引いた。彼は言う、「漢土は土地広大、人民衆多にして、其の海を隔てて近きものなり。近ごろ聞く、英夷の寇あり（アヘン戦争）、明裔の変あり（太平天国）と。若し洋賊をして其の土に盤踞せしめば、患害勝げて言ふべからざるものあらん。而して吾れ未だ其の帰着を詳かにせず、察せざるべからざるなり。」（幽囚録「安政元年晩秋」²³⁾）と。隣邦のこの内乱は日本にとって全く無関係でなく、むしろ大きな脅威だと松陰は感じた。この「脅威」認識の余韻は彼の思想転換後の安政二年五月頃にも尾を引いており、危機感を深めたと同時に、日本を守るために、アジアへの侵略を「先手」として唱えるようになる。

ここまでの松陰の太平天国への関心をまとめると、的確な情報が日本に未だ伝えられず太平天国の乱の詳細が未だに明らかになっていない時点から、松陰は強い関心を示し、懸命に情報を収集し、国防的見地から太平天国の乱を日本の外患として認識し、海防の緊要性を力説する一つの根拠にしていた。また、太平天国が「やそ教」との関わりがあると聞いて、警戒する必要をより一層痛感していた。

3 『満清紀事』から『清国咸豊乱記』まで

安政元年一月、松陰は『満清紀事』に触れることができた。この書物は松陰に的確な太平天国の知識を提供し、今までの松陰の太平天国に対する曖昧な知識を新たにした。

『満清紀事』はアヘン戦争から説き起こして、アヘン戦争の敗北の招いた清政府の暴斂、官僚たちの腐敗などによる民心の動揺、その背景下での太平天国の乱の発生、民衆の太平軍や政府軍に対する反応、太平軍の南京占領（二八五三年）及び洪秀全による南京建都前後の戦闘の経過、などを記したものである。太平天国の情報として誤りがないわけではないが、当時（安政元年三月頃）では、これまで日本に伝わった情報に比べて、格段と正確であって、全体的に見ても、比較的信頼できる太平天国乱史だとされている²⁴⁾。

松陰がこの標題の未だつかない写本を手に入れたのは安政二年一月末頃であった。安政二年一月二十七日付け友人の赤川淡水宛の書簡に次のように記している。「幽囚孤單、方に足下諸友を思うて、而も見るべからず。忽ち書及び清人記する所の新聞一通を得たり。欣慰何ぞ此に加へん。」（赤川淡水に与ふる書）²⁵⁾と。ここで言及している「新聞一通」とは『南京記事』こと『満清紀事』であった。その直後に成立した松陰の『清国咸豊乱記』（安政二年春・しがきは五月二十五日付けである）と題した著作は実はこの『満清紀事』

を種本にした翻訳である。

この書簡で松陰はまた「朝鮮探報にも又魁首姓は洪と称し、而して建元の事なし、此の記と合す。清商乃ち云ふ「明の裔、朱某、元を天徳と建つ」と。其の妄誕なること疑なし。」(同上)²⁶という。今までの清商や朝鮮の風説により得られた曖昧な太平天国の知識がこの『満清紀事』を読むことによつて是正されたのである。『満清紀事』でも太平天国の乱が明朝恢復を目指す「天地会」と混同されているところがあるが、松陰は『満清紀事』を読むことによつて、太平天国は、今まで朝鮮や中国からの風説書に伝えられた明の孫裔の明朝恢復を目指す運動でなく、実は洪秀全を指導者とした農民による中国全土を巻き込んだ大動乱だという認識を得るようになった。

松陰は前の風説書より一層確かな太平天国の情報、中国の一大変乱の経緯を載せたこの『満清紀事』を特別重視し、早速漢文体だったこの書を日本語(書き下し文)に翻訳し、所々に所感や批評を「割注」の形で記した。また、松陰は『満清紀事』を翻訳する際、「意識」の手法を取っており、しかも、中国の略図を附し、読者が読みやすいように工夫した。

では、松陰がこの書を翻訳したねらいは一体どこにあったであろうか。

松陰が『満清紀事』を翻訳するねらいは『清国咸豊乱記』の序文に記されている。「吾れの宜しく以て則と為すべき所のものは、清国に若くはなし。清国治平の日久しく、宴安日に甚し。豺狼を視ること猫狗の如く、蒼赤を視ること土介の如し。道光に一たび危ふく(アヘン戦争、咸豊に再び乱る(太平天国)。吾れ苟に能く其の道に反らば、則ち天下寧んぞ危と乱とあらんや。と。要するにここで松陰は、現在の日本の直面する問題を考える際、中国の動きを除いては考えられないこと、また中国の動きや対応は日本にとつて「鑑戒」となすべきことを鋭く指摘すると共に、当時の日本人の中国の変乱などに対する無関心、無感覚を警戒している。彼は続けて『清国咸豊乱記』の「例言」で更にこの点を強調している。「清国我れと海を隔てて相隣る。土広く民衆く、財富み物阜なり。故に其の国の治乱往々我に關係するに至る、欧墨諸夷、荒陬我れに遠きものの比に非ず。昔、天平宝字の時、唐土安禄山謀反す。天朝乃ち筑紫に命じ、武備を嚴にせしむ。古、朝廷の心を用ふる率ね斯くの如し。何ぞ今人察せざる。此の記を読むもの、切に此の意を忘ることなかれ。」²⁸と。当時中国で起きた太平天国の乱は日本でまだ一般的関心と呼んでいないことに鑑み、松陰はこの翻訳でもって人々の関心や警戒を喚起しようとした。中国の動きを日本の「鑑戒」とする彼のこのような

発想はすでにアヘン戦争の情報に接するときから形成され、太平天国への注目にはアヘン戦争を日本の「鑑戒」とする考えと一脈通ずるところがある。松陰が太平天国に特別の関心を持ったのはアヘン戦争と同じように、正にそれを「前車の戒め」として日本を鑑戒するためにほかならなかった。

4 松陰の太平天国認識

次に『清国咸豊乱記』の所々に記された松陰の「割り注」を頼りに松陰の関心や着眼点を窺うことにしよう。

まず、松陰が『清国咸豊乱記』でもっとも関心を示したのはアヘン戦争以降植民地化された中国社会の状況と民衆の動向である。

『満清紀事』は中国がアヘン戦争の敗戦により余儀なく開港した後の様子について、「初時民心尚多疑惑、及見番人設立学校、教育士女、英材委命、有司批断良頑曲直、重月糧以催工、民因趨進番人之路、派経書於舖戸、人多知有上帝之書、自是開港至今、唐番互処、則無分於爾我矣、然而世情自此縦横胆大、劫掠当舖渡船之事漸多、又不得清明才德之官来茲東粵、故世情愈趨而愈下、盜匪愈殺而愈多。」と記した。それに対して、松陰は「交易を開くときは其の禍必ずここに至る。殷鑑遠からず」(『清国咸豊乱記』⁽³⁰⁾ 割注)と批評を記し、中国のこの情景は和親条約後の日本にも間

もなく出現するだろうと切実に予測し、一層の驚きを禁じ得なかった。更に、前に伝えられた風説書と同じように太平天国と天主教との関わりが記されているから、このことが一層彼の警戒の念を強めたに違いない。彼がほぼ同じ頃の作「獄舎問答」で描いた和親条約後の日本の未来像や互市反対の発言などはいずれも『満清紀事』に根拠を見出すことができる。「獄舎問答」で同囚者の、「子が言の如くなれば、天下は泰山の安きにあるが如し。然らば、子永世無事を保するか、又変乱の慮もあるか。若し変乱あらば何事より生ずるか。」という質問に対して、松陰は答えて言う、「一治一乱は天道の常。治日常に少なく乱日常に多きは古来の習なれば、かく二百余年太平なるさへ前古比無きの盛事なるに、此の後又永世無事なること誰か敢えて是れを保せんや。抑々変乱の由つて起る如きは其の端頗る多し。予め云ふべきこと難し。然れども予が慮る所を以て是れを言はん。夫れ外夷の互市日に盛んに万国の帆檣吾が港口に林立し、夷館夷寨意に任せて築造し、夷輩良民と雑処せば、吾が国の政令善く我が民に及べども夷輩に及ぶこと能はず。其の極、我が民と云へども政令に遵はざる者有るに至り、奸民の密買、劫盜の奪掠従つて起る。此の時に於て、豺狼の野心を逞しうして我が国を上犯するの事あらば、邦内の民半ばは夷輩の役とならん。此の事、満清の覆轍昭々た

り。多言を費さず。且つ互市は皆外夷無用の物を得て、奢侈淫逸を導き、我が国有用の貨を失ひて、衣食の資、器用の本を闕く。先賢是れを論ずる詳かなり。今坐ながらにして万国の商舶を待たば、数年を出でずして国家疲弊し、民に菜色あり道に餓殍あり、流民蜂起し奸雄是れを扇し、黠夷是れに乗ずるに至る。是れ余が慮る所なり。」(獄舎問答^①)と。松陰の開港による内乱への危惧や恐れはこの史料によって明らかに表明されている。この時点で彼は国家的見地や護民の立場から互市にも反対したのである。

更に、注目すべきことは、『清国咸豊乱記』で松陰が、洪秀全の「用兵の速やかなる」ことや、太平軍の「彼の党到る所、財貨を掠めず、婦女を犯さず、是れに依りて、向ふ所の庶民安堵し、悉く服従す」などにより勢力がどんどん拡大することに驚きを禁じえないと共に、政府軍よりも太平軍の方に協力した民衆の動きに非常に注目していることである。『満清紀事』では、太平軍が南京を占領し、「天京」として都を立てた後、引き続き「西征」と「北伐」を通じて勢力を拡大し、衰えを見せなかったことを記し、北伐軍が「河南を擾り、山西、陝西に蔓延す」と記した箇所^②に、松陰は「凡そ洪が党の行兵を見るに甚だ速かなり。其の実は、彼れ真に能く斯くの如きに非ず、天下民心怨叛、洪が党の風を聞き、皆旗を揚げて是れに応ずるのみ。然ら

ざれば安んぞ能くここに至らんや。」(『清国咸豊乱記』^③割注)と記し、太平天国の勃発と勢力の拡大は特に「民心」の怨叛・動揺によるものだとして認識している。

また、松陰は『満清紀事』に記された太平天国の乱の勃発に至るまでの清国の内政面にも着目している。アヘン戦争の敗戦により、中国は香港を割譲し、莫大な戦争賠償を支払わざるを得なかった。その後、清政府は外に失うところを、内の民からの収奪によってつぐなおうとすることよりほかに、なすすべを知らなかった。民衆は空前の貧困生活に苦しんでいた。彼は「洪秀全等を初め諸流賊の起る、暴斂苛税、民、手足を措く所なきに由る。」(『清国咸豊乱記』^④割注)と、鋭く太平天国発生の根因を指摘し、為政者の失政を追究した。また、太平天国の乱発生後、国の財政がひどい打撃を受け、それを再建するために、清の朝廷が取った政策、①アヘンの原料となる罂粟花の運上(租税)を再開し、②金器を潰して金銭を鑄り、流通させ、③都市部の店舗税を全国に拡大して徴集する、の三策に対して、松陰は第二の策が「稍々可なるのみ」といいながら、第一、第三の策について「所謂醉を悪みて、酒を強ふるが如し、安んぞ乱れざることを得ん。」(『清国咸豊乱記』^⑤割注)と増税によって財政の再建をはかる清朝政府の対応を批判し、それが変乱の原因だと考え、為政者側の責任を追及した。松陰

は前述の南部の農民一揆の原因を「連年苛虐の致す所」と見なしたのと同じ見方で太平天国の乱を見ている。後、「獄舎問答」で彼は重ねてこの点を強調し、「百姓一揆の如きは、連年苛虐の致す所にして触るる所ありて発す……譬へば風起り火燃ゆるが如し。其の未だ起らざる、人其の火気あるを知ることなし。其の已に起るや、草茅屋舎一掃残すことなし。実に恐るべしと雖も、久々堪重を持すること能はず。」（獄舎問答³⁵）と記している。

以上のように、松陰が『清国咸豊乱記』でもっとも注目したのは、(一)太平天国の乱の背景、(二)乱の原因、(三)民衆の動向、の三点にまどめることができる。松陰のその後の思想は日本がいかにして太平天国の乱のような動乱を防ぐかをめぐって、展開されている。

右の外に、『清国咸豊乱記』において松陰の太平軍の人物に対する評価も注意すべきである。というのは彼の人物評価には清朝の為政者の用人政策への批判だけでなく、彼の人材登用論（人間を本来的には平等とみる人間観を前提とする）も含まれているからである。『満清紀事』は錢江（この人物は実際には太平天国と無関係の人だと後の研究者によって明らかにされている）という人物を記している。『満清紀事』によれば、錢江は「素より胆略あり。博学多聞」にして、最初林則徐のアヘン取り締まりに協力したが、林が解職されてか

ら、広東に流浪し、清がイギリスと和睦した後、錢江は頻りに和睦の非を弁論した。これに対して、松陰は「錢江は流賊中の人に非ず、清人用ふること能はず、去つて賊となるに至る。惜しいかな」（『清国咸豊乱記』割注³⁶）と書き、有志で有能な人を用いない清政府を批判した。また、錢江は洪秀全に軍事的にも多く献策し、南京に都を定めるよう献策し、洪秀全は「之れを悦し、即ち其の計に遵ひて事を行ふ」と記しているのに対して、松陰は「斯くの如き者、豈に流賊を以て視るべけんや。」（『清国咸豊乱記』割注³⁷）と正当な評価を与えている。この人物評価は、アヘン戦争中の広東三元里抗英の義勇への評価とともに、有志・有能の人はすべて価値のある存在で、尊敬すべきで、身分制に拘らず、これらを用いるべきだ、という彼の人材登用論と深く関わっており、晩年に唱えた「草莽崛起」の思想とつながるものと見られる。また、『満清紀事』に記された太平軍の「安民告示」（実はこの示は太平軍のものでなく、「天地会」の告示である）に触れ、「此の示、民を安んずるを以て説を立つ。乃ち人心を服するに足る。盗又道ありと、信なるかな。」（『清国咸豊乱記』割注³⁸）と記し、太平軍に対する理解が見られる。

松陰は太平天国の乱の発生原因や太平軍や太平軍中の人物に正當な理解や評価をもっているが、それは必ずしも洪

秀全の「反乱」に同調していることを意味しない。彼はむしろ太平天国をあくまでも中国の一大変乱としてとらえているのである。また、『清国咸豊乱記』で太平軍のことを「賊」「賊党」（中立した立場で書かれた『満清紀事』では、ほとんどの場合、太平軍のことを「党」「徒党」「会党」などと称しているが、「賊」の称呼も見られる。『清国咸豊乱記』では、『満清紀事』で「徒党」と呼んだところを「賊」「賊党」「賊徒」などと書き直した箇所も見られる）などと称し、前に挙げた赤川宛の書簡に「国内一和」の立場から「洪錢（洪秀全と錢江）の義は遂に与すべからざるなり」（赤川淡水に与ふる書^⑧）と自らの態度を表明している。「内憂外患」の時このような変乱を避けるべきだと考えている。彼のこの姿勢は後「咸仁丸」で上海を訪れた弟子の高杉晋作に受け継がれている。なお、この頃（安政二年三月）から話題（月性への書簡）にのぼった「倒幕」の主張に松陰が反対の態度をとったのも、太平天国のような乱の日本の発生を警戒したからにはかならない。

三 松陰の思想的転換と魏源批判

松陰の『満清紀事』に触れた後の思想的变化について、一つは「民政・海防」兼拳論から「民政」「内治」優先論への変化、もう一つは魏源の海防論評価の変化を通じて探

ってみたい。

1 「民政」「内治」優先論の確立

『満清紀事』に触れた直後（約二か月後）の安政二年四月六日に書かれた「獄舎問答」は、彼が萩にある野山獄の囚者の質問に答えた形で綴られた獄中の記録である。われわれはこの記録から松陰の思想的転換を見ることができ、太平天国のような内乱の日本の発生を防ぐため、松陰は今までの軍備の充実を主な内容とした海防論を一転して、「民政」の緊急性を強調するようになった。「獄舎問答」で、ある同囚者の「子が説を得て、太平の悲しむべきことを知る。実に外夷は是れ皇国の大患なれば、凡そ皇国の民たらん者、深く其の善策を思ひ国に報ゆべし。今列藩に在りて急に手を下すべきことは、砲を鑄、艦を造る等の事、論を待たず。其の他是れに繼いでなすべき事は何事にやあらん。請ふ一々に教へ給へ。」^⑩という質問に対して、松陰は「天下に機あり、務あり。機を知らざれば務を知ること能はず。時務を知らざるは俊傑に非ず。今已に天下の機を失ふ、方に砲を鑄して錢とし、彈を鑄して鋤きとなすべき時なり。然るに尚ほ株を守りて砲艦を急務と思ふは、虚気の甚だしきに非ずや。……今の務むべきものは、民生を厚うし民心を正しうし、民をして生を養ひ死に喪して憾みなく、上を

親しみ長に死して背くことなからしめんより先なるはなし。是れを務めずして砲と云ひ艦と云ふ、砲艦未だ成らずして疲弊之れに随ひ民心是れに背く。策是れより失なるはなし。……」(獄舎問答^①)と答え、造砲購艦などを急務とした当時の海防論を「機を知らない」として斥け、「民政」の重視や「民心」の把握こそ眼前の急務だと高唱している。この点について、「獄舎問答」の対話が続く。ある人の、「民心は本なり、器械は末なり。本末緩急、吾れも亦何ぞ疑はんや。但だ砲を鎔して錢となし、彈を鎔して鋤となすは甚しからずや。且つ子天下の太平を言ふと雖も、治にも乱に忘れざるは古の令典なり。砲なく彈なくして一旦事不測に起らば、子將た何を以て是れを待たん。幸に其の説を悉せ。」という質問に対して、松陰は答えて言う、「予も亦曾て略は兵法を学ぶ。戰勝攻守の術素より心を尽くす所なり。予深く利害を思ひて此の論を發する所なり。西洋夷と兵を交ふる如きは、十年外に非ざれば決して此の事なし。其の説前に云々する如し。然れども国内の乱の如きは實に一日も忘るべからざる所なり。……人正に武備を嚴にし民力を疲らす。吾れ正に武備を弛べ民生を厚うす。一旦事ある、太旆の向ふ所、簞食壺漿出でて迎へざる者あることなし。」(獄舎問答^②)と。「満清の覆轍」がいつか日本に出現する恐れが松陰の脳裏から一瞬も立ち去ることがなかったこと

が読みとれる。太平天国のような内乱を避けるため、彼は挙国的国防体制を模索した。それは艦・砲に頼るのでなく、また、支配者側のみでなく、一致団結した全国民の積極的協力を要請するような根本的で徹底的国防体制である。それを実現するために彼は孟子の「仁政」や「民本主義」思想に新たに光を当て、その実践として為政者に「善政」「仁政」を迫ったのである。「余が策する所は武備の冗費を省き、膏沢を民に下さんとなり。……専らに下を利用するを務めて上を利用するを務めず。是くの如くなれば民富み且つ庶にして、国従つて旺盛す。……是れ民政の要、本を修むるの論なり。……相共に天下を謀り国威を振はんと欲すればこそ、かく国力を強くし、国本を養はんとするなり。今の武備を壮にするもの何ぞ言うに足らん。」(獄舎問答^③)と。松陰がこの時点で提出した「民政」の具体策は、兵卒の減少、武備の冗費の減縮、節約、減税、富民富国策などからなっている。この民本主義的発想は、一週間後(四月十二日から)野山獄で同囚者に行つた孟子の講義及び二か月後の六月十三日から執筆を始めた『講孟節記』で更に展開されていくのである。このことから、太平天国の乱と松陰の孟子傾倒の間に一つの接点ができたといふことがいえよう。

2 松陰の魏源批判

次に松陰の魏源に対する評価の変化に着目しよう。松陰が魏源の海防論に対し根本的疑問を抱き始めたのはこの頃からである。以下は松陰の魏源への評価の変化に着目して松陰の思想形成と太平天国の乱との関連を探りたい。

松陰が初めて魏源の著述に出会ったのは嘉永三年九月十五日九州遊学の途中である。彼はこの時平戸の家老葉山佐内から借りた、魏源がアヘン戦争の最中に執筆した『聖武記』⁴³（十四卷、一八四二年）に触れた。アヘン戦争の生々しい情報と共に、「夷の長技を以て夷を攻む」という魏源の新たな攘夷思想（海防論）は若い頃の松陰を魅了した。松陰は熱心に書中の「佳句」を抄録し、その後、嘉永四年江戸遊学の折に有志と度々『聖武記』の会読を行い、研究を続けていた。松陰の著述の所々に魏源の海防論が彼の新たな兵学思想の形成に少なからぬ影響を与えたことが見える。

『ベリー来航』後、魏源がかつて『聖武記』で提出した艦砲の購買策を「艦を造るは艦を購ふに如かず、砲を造るは砲を購ふに如かず」の二語、清人魏源、聖武記中にて之れを言ふ。是は深く外国の事情を知りての申し分なり」

（『兄杉梅太郎宛』安政元年十二月二十四日⁴⁴）と評価し、それを取り入れるよう極力唱えていた。また、野山獄で松陰は当時幕末の海防論の必要から一時日本を風靡した、魏源の『海

国図志』を目にすることができた。安政元年十一月二十二日付け萩にいる兄宛の手紙で彼は『海国図志』を読んで、それを写し、兄に校正を頼む旨を記した上、「林則徐・魏源兩人とも有志の士にて、殊に蟹行書に通じたる人なり。如何にも有志の士に蟹行学を勧め、かかる好書著述せ度ものに御座候。尊意如何。」（『兄杉梅太郎宛』安政元年十一月二十二日以後⁴⁵）と『海国図志』が好書だと誉め、その著者の魏源やアヘン戦争でイギリスへの抵抗を力説した林則徐に外国語に通ずる有志の士として高い評価を与えている。また、「野山獄読書記」には松陰は『海国図志』を愛読し、野山獄で数回も読んだことが記されている。要するに安政元年末までに松陰は魏源がアヘン戦争敗戦の教訓から考案した、軍勢力による海防論に対して全面的に賛成し、外敵の侵略を防ぐのに有効な方策だとしてそれを疑うことがなかったのである。

ところが、『清国咸豊乱記』の成立と同じ頃の安政二年五月四日、松陰は魏源の『海国図志』の首篇「籌海篇」を読んで、魏源が外患に目を取られ、内乱の危険性を指摘しなかったとして、その「不徹底な」海防論に根本的疑問を持つようになった。「清の魏默深（魏源の字）の籌海篇は守を議し、戦を議し、款を議し、^{しんしん}鑿々として款に中る。清をして尽く之れを用ひしめば、固より以て英寇を制し、魯

私を馭するに足らん。然れども吾れ独り疑ふ、此の書の刻せられしは道光二十七年（一八四七）『海國圖志』六十卷本を指す年に在り。曾（そう）ち未だ三四年ならずして、広西の民変、擾れ八省に及び、禍十年に延き、遂に北京は殆ど守らざるに至る、其の底止する所、未だ知るべからず。則ち清の宜しく慮と為すべき所は、外夷に在らずして内民に在るなり。何を以て黙深は一言もここに及ぶことなかりしか。世の守を議する者は、堅敦（けんどん）を築き巨砲を鑄、客兵を調するに過ぎず。戦を議する者は、其の宜しく為すべき所を為すこと能はず。款を議する者は、徒らに已むを得ざるに逼らる。是れ皆黙深の深く憂ふる所なり。而るに清乃ち之れを為すに姑息以て夷謀を養ひ、駿剝以て民の膏を竭す、未だ内変外患を致さざるものあらざるなり。且つ黙深の言に曰く、「匪徒能く数百二三千人と号召する者は、其の人皆偏裨の将才にして、其の属皆精兵なり。而るに文法吏は目して乱民と爲し、漢奸と爲し、収めて用ふることを為さず」と。然らば広西の乱は、黙深其れ已に此れを知れるなり。噫、民は内なり、夷は外なり。外を謀りて内を遺る者は凶なり。内を治めて外を制する者は吉なり。悲しいかな。」（『籌海篇（ちうかい）を読む』）と。魏源に投げかけた疑問は同時にそのまま幕末日本の海防論者たちへの批判と理解できよう。今まで抱えていた「海防・民政」の課題を修正し、「内治」「民政」優

先の見地に至ったのは、いうまでもなく安政二年一月『満清紀事』の太平天国の記述を通じて「広西の民変」の真相を知ったからにほかならなかった。この事実からも太平天国の乱が松陰に与えたインパクトが如何に大きかったかが分かる。

以上の考察から、太平天国の的確な情報に触れる前と後の松陰の思想ははっきりと一線を画すということがいえる。

おわりに

以上、太平天国の乱が松陰に与えたインパクトを、『満清紀事』に触れる前後の松陰の思想的变化を辿って考えてきた。

太平天国の乱の生々しい情報は松陰の「民政・海防」の海防論を「民政」優先に転向させるのに加速的役割を果たしたのみならず、魏源の攘夷論の不徹底さへの根本的疑問の生成をもたらしした。それだけでなく、太平天国の乱の研究を通じて、松陰はその後の自らの思想的課題や思想的進路を一層明確に自覚するようになる。彼の同時期及びそれ以後の「民政論」、「民本主義」の始述者孟子への傾倒、『講孟劄記』の執筆、更に晩年の改革思想を示す「草莽崛起」論の提出などはいずれもこの期の太平天国への関心と深く関わっている。また、孟子との出会いによって形成された

「民本主義」的立場はその後の体制批判、「倒幕革命」論につながっていく。この意味から、太平天国の乱は松陰の思想形成及びその後の思想展開に軽視できない重要な意味を持つていえることがいえよう。

註

- (1) 詳しくは拙稿「アヘン戦争と吉田松陰の思想形成——世界情勢への開眼と新たな民政観・兵学観の形成」日本文芸研究会編『文芸研究』一四〇集（一九九五年九月）を参照されたい。
- (2) 山口県教育委員会編『吉田松陰全集』（全十二巻）普及版、第二巻、二七〇頁、岩波書店、一九三八—一九四〇年（以下は『全集』（二二二七〇頁と略す）。
- (3) 例えば、増井経夫著『太平天国』（岩波新書、一九五一年。後同著『中国二つの悲劇——アヘン戦争と太平天国』弘文堂アテネ文庫、一九五六年、に収められ、更に研文出版『研文選書1』、一九七八年、として再版される）、市古宙三『幕末日本人の太平天国に関する知識』（『開国百年記念明治文化史論集』、一九五二年。後、同氏著『近代中国の政治と社会』、東京大学出版会、一九七一年）、小島晋治『吉田松陰と太平天国』（『中国近代思想史研究会会報』第八号、一九六〇年九月）、野原四郎『太平天国の乱と幕末日本』（『中央公論』第七十七—二、一九六二年）、増田渉『満清紀事』とその著者——わが国に伝えられた「太平天国」について（鳥居久靖教授華甲記念会編『中国の言語と文学』、一九七二年。後、同著『西学東漸と中国事情』

岩波書店、一九七九年、に収められる）、小島晋治『幕末日本と太平天国——水戸藩のある庄屋の「見聞録」の記事にふれて』（『水戸論叢』3、一九六六年、後同氏著『太平天国革命の歴史と思想』研文出版、一九七八年）、鹿野政直『吉田松陰』（芳賀徹等編講座・比較文学3『近代日本思想と芸術I』東京大学出版会、一九七三年）、芳賀登『阿片戦争・太平天国・日本』（『中国近現代の諸問題——田中正美先生退官記念論集』国書刊行会、一九八四年）、などが挙げられる。

(4) この書は原名『南京記事』、広東人羅森著。安政元年三月頃日本に伝えられ、安政二年春松陰によって『清国咸豊乱記』の題で翻訳される。

(5) 前掲市古著『近代中国の政治と社会』一一三頁、東京大学出版会、一九七一年。

(6) 小島晋治『幕末日本と太平天国——水戸藩のある庄屋の「見聞録」の記事にふれて』（『太平天国革命の歴史と思想』所収、研文出版、一九七八年）。

(7) 前掲小島著『太平天国革命の歴史と思想』二九八—二九九頁。

(8) 小島晋治『吉田松陰と太平天国』（『中国近代思想史研究会会報』第八号、五十七頁、一九六〇年）。

(9) 『将及私言』『全集』（一）三〇三頁。

(10) 『全集』（一）三〇三頁。

(11) 『全集』（一）三〇三—三〇四頁。

(12) 『全集』（八）一九一頁。

(13) 『全集』（八）二〇一頁。

- (14) 『全集』(八)二二〇頁。
 (15) 『全集』(八)二二四頁。
 (16) 『満清紀事』の成立や著者について、増田渉が「『満清紀事』とその著者——わが国に伝えられた『太平天国』について」(『西学東漸と中国事情』所収)という論文で詳しく考証している。参照されたい。また、増井、市古阿氏もこの書に触れている。詳しくは増井経夫「太平天国に対する日本人の知識」(同『中国二つの悲劇——アヘン戦争と太平天国』所収、研文出版「研文選書1」、一九七八年)、市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」、一九五二年(同『近代中国の政治と社会』東京大学出版会、に収められる)などを参照されたい。
 (17) 東北大学狩野文庫蔵木活字本『満清紀事』。
 (18) 『全集』(八)一五四頁。
 (19) 前掲『近代中国の政治と社会』九六頁、東京大学出版会、一九七一年。
 (20) 『全集』(八)三四二—三四三頁。
 (21) 同上、三四三頁。
 (22) 前掲『近代中国の政治と社会』一二八頁、東京大学出版会、一九七一年十月。
 (23) 『全集』(一)三四九頁。
 (24) 上掲市古著『近代中国の政治と社会』一一一頁。
 (25) 『全集』(四)一三三頁。
 (26) 『全集』(四)一六頁。
 (27) 『全集』(二)二二三—二四頁。
 (28) 『全集』(二)二一八頁。

- (29) 版本『満清紀事』東北大学狩野文庫蔵に拠る。不自然な箇所は『有所不為斎雜録』、市古宙三著『近代中国の政治と社会』によって訂正する。
 (30) 『全集』(二)二二二頁。
 (31) 『全集』(二)二六八—二六九頁。
 (32) 『全集』(二)二五五頁。
 (33) 『全集』(二)二五二頁。
 (34) 『全集』(二)二五二頁。
 (35) 『全集』(二)二六七頁。
 (36) 『全集』(二)二三七頁。
 (37) 『全集』(二)二三八頁。
 (38) 『全集』(二)二三二頁。
 (39) 『全集』(四)一四頁。
 (40) 『全集』(二)二六九頁。
 (41) 『全集』(二)二七〇頁。
 (42) 『全集』(二)二七三頁。
 (43) 『全集』(二)二七五—二七九頁。
 (44) 実際、松陰が読んだのは「聖武記付録」、つまり十四巻中の十一巻以降の付録の部分で、「武事余記」として「兵制兵餉」(巻十二)「掌故考証」(巻十二)「事功雜述」(巻十三)「議武五篇」(巻十四)が収められている。
 (45) 『全集』(八)三五四頁。
 (46) 『全集』(八)二九八頁。
 (47) 『全集』(四)三六—三七頁。